

# 末吉宮論

——中世日本との関わりの中で——

石上 敏

- 1、はじめに
- 2、末吉宮の沿革
- 3、末吉宮縁起の解釈
- 4、末吉氏と熊野権現
- 5、天界寺との関わり
- 6、おわりに

## 1、はじめに

壊滅的な砲撃を受けた沖縄島では、資料保存が不可能であったと言われて来た。近年に至り、保存機能の充実しつつある保存機関でも、収集対象は明らかに近代以降に偏している。そのためあつてか、沖縄では古典籍への対応が未成熟であると感じることが少なくない。もちろん、日本本土の他のどの県とも比べようがないほど戦後の沖縄の歩みは困難であつた。しかし、調査・収集・保存・研究という循環を意識して回していかなければ、沖縄字はますます近現代に偏して行くばかりではないだろうか。

本稿では、沖縄の宗教史に関する考察を進めていきたいと思う。一九九〇年から沖縄に通い始め、何度目のことであつただろうか、波上宮なみのうみぐうを訪れると末吉宮補修のための瓦の寄進を受け付けていた。瓦の裏に日付と氏名を書かせてもらえるのである。私は喜んで筆を取った。今でも、その瓦が末吉宮の屋根にあることを思うと、しあわせな気持ちになる。

思い返せば、このことが沖縄の宗教史について考える大きなきつかけとなつた。二十一世紀に入る頃から、沖縄の自己再発見、いわばルネッサンスが進んでいる。また、スピリチュアルブームの追い風を受けて、広義のシャーマニズムが以前にもまして受け入れられている。琉球・沖縄の宗教や宗教史に対する、より広い関心・より深い理解を喚起するきつかけになればと思うが、未だ歴史的な関心には必ずしもつながっていないように見える。

琉球八社に関しては、未だわからないことが多い。本稿では、手始めに末吉宮について考える。

## 2、末吉宮の沿革

まずは手近な資料によって、末吉宮の沿革をたどりたい。

康熙五十二年<sup>(2)</sup>（一七一三年、正徳三年）に成立した『琉球国由来記』<sup>(3)</sup> 卷十一密門諸寺縁起「大慶山万寿寺」の条に載る『大慶山権現縁起』は末吉宮の開創を景泰年間（一四五〇～五七）とし、その創始について次のような縁起伝承を記している。以下の考察のためにA・Bの記号を付し、意識して引用する。

A 琉球王国第一尚氏第六代尚泰久の御世、天界寺の前任職・鶴翁和尚が壮年の折、倭国で修行していた際に熊野を遙拝し、「学道の修行を成就したならば、帰国して本意の後に熊野へ参詣します」と誓った。やがて鶴翁の学道修行は成就したので、誓いを果たすべく尚泰久に暇を請うたが、泰久王は許さなかつた。

B 暇乞いを繰り返す鶴翁の夢に、ある時何者かが示現して「師よ、志を遂げたいならば、北山に向かつて大きな声で呼ばわりなさい。応ずる所に靈験があるはずで、そこがすなわち居所である。私は熊野権現である」と述べた。鶴翁は夢から醒めて、奇異に思いながらも一峰に到つて声を挙げると、前の山に響く所があつた。その場所を尋ねると崎嶇きくせんがん岩としてまさに靈地、人も及び難い場所であつた。そこにはひ

とつの鬼面があり、すなわち靈験であると鶴翁は丁重に拝した。このことを王に奏上したところ、王もまた靈夢を見ていたので、これは意味のないことではないだろうと大臣等に詔して大社(末吉宮)を建立したという。また、鶴翁がこの場所を歩いた折に一枚の鏡を得て、靈光を放つために社殿内陣に蔵した。

和暦慶安元年(一六四八)に出版された『琉球神道記』<sup>(1)</sup>巻第五「末好権現事」にも、ほぼ同様の伝承が記載されている。『琉球国由来記』に記述される万寿寺(現・遍照寺)<sup>(2)</sup>は、真言宗八公寺の一つとされ、末吉宮の別当寺であった。鳥越憲三郎は当社建立と同時に建立されたのではないかと推測している。<sup>(3)</sup>

官社へは王府より神職の役俸と営繕費が支給されたが、当社へは更に祝部・内侍・宮童等が置かれた。そして祝部・内侍等の神樂の着服は、寺社座から支給されたという。この社は琉球八社の一つとされた。琉球八社とは、琉球国府から特別の扱いを受けた八つの官社で、末吉宮・波上宮の他に沖宮・識名宮・普天間・満宮・八幡宮・天久宮・金武宮のことである。尚泰久の景泰七年(一四五六)頃、天界寺住持・鶴翁和尚が熊野三社権現を勧請したことに始まるとされる。すなわち、鶴翁は琉球八社の祖とも言い得るのである。

『琉球国由来記』に「神道記之説」と記されていることから、『琉球国由来記』が『琉球神道記』を参照したことが知られる。このことより、慶安元年(一六四八)以前に上記の鶴翁和尚伝承が存在したことが明らかである。また、ここには祭神が熊野である理由も語られているが、それがなぜ熊野であったかという必然性まではわからない。また、末吉という名称の由来も明白ではない。

参道石碑文より必要部分を要約すれば、末吉宮は俗に「社壇」と呼ばれ、本殿は三間社流造り本瓦葺きで前面に向拝を付す。参道の最上部から本殿まで三十六段の石造階段を中国風に磴道と呼び、本殿と祭場の間に切石積みきせきづみの石造単拱(アーチ)橋が架けられている。磴道は昭和四十六年に修理され、本殿は昭和四十七年、すなわち本土復帰の年に復元された。以下は引用する。「末吉宮の下方には、末吉宮の神宮寺で俗に『末吉の寺』と呼ばれた遍照寺(元の万寿寺)の跡がある。この寺は山号を大慶山といい、真言宗に属し、沖繩における神仏混淆の信仰形態を知るうえで重要な資料である。また、社殿の周囲の崖下には点々と拝所が設けられ、信仰の対象となっている」。清水の舞台を思わせる「懸造り」(懸崖造り)と、左右非対称の拝殿が非常に印象的である。

琉球八社の内、八幡宮以外いずれも地名から名付けられたようであるが(八幡宮も通称は安里八幡神社であり、地名を冠する)、逆に社名が地名となった可能性もあり軽々に判断できない。とりわけ普天間・天久などは当初からの地名とは思いにくい。いずれも米軍の占領地となり、ひとつは未返還の象徴、ひとつは返還実現の象徴として、現代人にとっても著名な場所である。

冊封使録には末吉一帯の丘陵を「龜山」と呼称したとあり、「大慶山権現」「末吉権現」「末吉神社」等の記録も見られる。先述の磴道も含め昭和十一年に国宝に指定されたが、沖繩戦で破壊された。末吉宮の祭神は、伊弉冉尊・速玉男尊・事解男尊の三柱であり、熊野十二所権現の内、第一殿・西宮（結宮）の伊邪那美尊・事解之男神、第二殿・中宮の速玉之男神と重なる。創建は、先記の通り尚泰久治世で、一説に景泰七年（一四五六）とも。先述の通り、天界寺の鶴翁和尚が熊野権現を勧請し、泰久が社殿を建立したとされている。またこの社の守りとして万寿寺（後に遍照寺に改称）を隣地に建てたとも言われている。

末吉宮自体が「末吉の寺」とも呼ばれ、尚泰久が寄進した鐘（「末吉の開静鐘」）が、後の時代に組踊『執心鐘入』（『道成寺』の翻案）の舞台にもなった。現在、末吉宮について知られるところは、ほぼ以上の範囲に限られる。

### 3、末吉宮縁起の解釈

#### (1) 鬼面

鶴翁の倭国修業は、いわば末吉宮縁起の前段である。通常の寺社縁起であれば、Bの部分から始まるだろう。しかし、すでに見たように、この縁起には発端があった。すなわち前段であるAの部分を一旦消去し、Bだけで考察してみるという視点も有効なのではないか。

物語における夢告は、中世に至って最盛となる。この縁起が極めて中世的である所以だが、夢告の主が熊野権現であることにまず注意しておきたい。というのも天界寺は臨済宗であって、琉球王朝における真言宗と熊野との結束というスタンダードからは外れるからである。鳥越憲三郎は、琉球に臨済・真言という禅宗と密教（東密）が伝わったこと、とりわけ臨済宗が優勢であったことを論じた（『琉球宗教史の研究』）。ただ、琉球王朝から寺禄を給された八公寺はいずれも真言宗で、かつ境内に神社を設けている。それらが琉球八社と呼ばれるものである。八社は、よく知られるように八幡社（安里八幡神社）を除いて他はすべて熊野権現を祀る。海商・海民の介在が想起されるところであるが、臨済宗天界寺の僧侶鶴翁が縁起に記されるほどに熊野を信仰した（そのように記された）理由は一体どこから生じたのだろうか。

このように考えるとき、熊野権現の夢告が北山へと告げたことは注意されてよい。首里の天界寺に対して末吉宮もまた首里の域内にあり、北山というより単純に北に向かってと考えることもできる。天界寺は首里城の南西、末吉宮は北北西に当たり、北へ約2kmの距離にある。現在で

もなお末吉宮は山深く感じられる場所にある。当時はまさに「崎嶇嶮岩として」、「人跡およばざる」と呼ぶのにふさわしい場所であったろう。そこに鬼面を見つけたというのは能面のような鬼の面であつたであろうか、それとも鬼面に見まがう岩石を見いだしたというのであろうか。「崎嶇嶮岩」という、いかにも禅宗らしい表現からは、琉球石灰岩由来の凹凸の多い岩石層の中でも、とりわけ突岬とした岩肌の様子が伝わってくるようである。いずれにせよ、この要素が霊地の選定という物語に、深く奇譚の趣を与える根拠となつてゐる。

琉球の神社縁起の中でも奇譚といえは波上宮の由来であり、浜辺で光り人語を話す石がその起源となつてゐる。また、沖宮の縁起も海中から光を発する霊木に由来する。山中に熊野権現と弁財天が示現したと語るのは天久宮であり、王の射落とした鳥の落地点と海に浮かぶ鐘を縁起とするのは安里八幡宮である(いずれも『琉球神道記』)。そもそも縁起とは、大胆に言い換えれば奇譚のことであつた。

鬼面は、『執心鐘入』に象徴されるように組踊に用いられる必須アイテムである。玉城朝薫が踊奉行に任じられるのは十八世紀になつてからであり、むろん末吉宮の縁起が先行する。しかし、それ以前に鬼面を琉球人が知らなかつたかといえは、当然そんなことはない。たとえば名護市安部地区の豊年祭には、ウニホーガナシ(鬼の面の神)と呼ばれる鬼面神が登場する。「村の神様」「踊りの神様」として崇められているが、その起源は四百年以上前とされ、それが正しければ十六世紀の発祥となる<sup>(1)</sup>。

また、大須観音(愛知県名古屋市中区)は真言宗智山派であるが、寺宝として鬼面を蔵する。当寺の大須文庫(真福寺文庫)には「熊野三所権現御記文」など四点の熊野関係資料があり、重要文化財に指定されている。醍醐寺・根来寺と共に日本三経蔵と謳われ、仁和寺・根来寺と共に本朝三文庫と称される同文庫は一万五千冊に及ぶ古典籍を蔵し、「真福寺本」といえば、現存最古の『古事記』写本である真福寺蔵古事記を指す。鬼面を蔵する神社は多いが、寺院では、他に、私の知る限りでは高野山真言宗の法光寺(兵庫県三木市)が鬼面を蔵する。

これらの事例からは、臨済宗や熊野信仰と鬼面や鬼との関わりが、いまひとつ直截に結びつかない。臨済宗と鬼面といえは、沖縄では石垣島の臨済宗桃林寺に付設された熊野系の権現堂に四面の鬼面が蔵されること、そして『無門関』四十二則「女子出定」に見える頌、「出得するも不出得なるも、渠と儂と自由を得たり。神頭並びに鬼面、敗闕当に風流(風流に当たる)に思い至る程度である。

もちろん、鬼面を蔵するのは密教寺院に限らない。たとえば金沢市寺町の法華宗寺院・承証寺寺内の鬼子母神には、安宅関の沖合より浮かび上がったとされる鬼面があり、節分会に開帳される。節分といえは熊野那智大社の鬼面札は広く知られる。節分と鬼との関わりは、すでに日本本土に普及していて、それ以上に中世琉球が鬼との関わりを密に持ったとは考えにくい。それでは、琉球の他の神社の縁起には出て来ない末吉宮縁起の「鬼面」とは何に由来し、いったい何を意味するのであろうか。



(2) 方位

ここで改めて注意されるのは、末吉宮縁起において鶴翁の夢告に立った熊野権現が、「北」への注意を喚起したことである。この場合、「北」とは実際の末吉宮の方角を指すが、それに加えて琉球王国から見た熊野の方角（正確には北東に近い）を指示しているだろう。北東を意味する八卦の「艮」が象徴するのは、第一に「山」である。続けて、鶴翁が赴いた先に鬼面があったという点からは、本来「穩」であった才二が倭国で鬼のイメージとなった原型の「丑寅」、すなわち「牛」と「虎」との合成獣（和製の鬼）を含意していないだろうか。

室町時代に出来たとされる「桃太郎」の物語は、まさに鶴翁のいた十五、六世紀に語られていた。桃という霊果の精が、犬（戌＝西北西）・猿（申＝西南西）・雉（酉＝西）という裏鬼門の力を借りて鬼門（丑寅）を破るという方位の物語である。といつても、もちろん鶴翁と「桃太郎」との間に関わりがあると言っているのではない。おとぎ話という身近な物語の中にも方位意識を閉じ込めようという時代、それが鶴翁の赴いた中世日本だったということを確認しておきたかった。それに対して、琉球国での方位意識はどうであっただろうか。

復元された、すなわち発掘調査で知られる限りの首里城の正殿が西を向いていることは、冊封使の記録でも指摘されてきた。そのことに対する琉球側の回答は、本来南向きであったものを支障が生じて九〇度西向きに変えたというものであった。しかし、これは琉球側の方便であり、当然最初から正殿は西を向いていたと理解できる。第一に、現在に至るまで南向きの遺構は発見されていない<sup>(12)</sup>。南向きの建物とは中国からの遣使を迎える北殿のことを指し、この字型で正殿・南殿とつながっている。首里城の地形は西向きに正殿を配置するのにつけてつけの場所であり、浦添から首里に移った最初の時点から琉球王朝は西向きに正殿を作ることを決めていただろう。明の都に向けたという説もあるが、そうであれば明使にそのように伝えればよく、南面こそが天子の居殿の根拠と信じて疑わぬ明使・清使の眼には異様なものと映ったに違いない。

その反応を見て、あるいは中国使の到着する前から、琉球側は想定問答と回答を準備していたと思われる。尚清王即位の慶賀正使・陳侃が嘉靖十三年（一五三四）に琉球を訪れた際の記録に「南を以てする者は旧制にして、風水に利あらず。返（却）つて西をもつてする者を正殿と為す」（『使琉球録』）と記すのは、つまりそういうことであろう。同様の回答は、ほぼ百年後の正使・徐葆光も「山形の殿址、本（元）南北に向かう」（『中山伝信録』）という形で示唆している<sup>(13)</sup>。それは事実とは異なる経緯を述べて相手を謀ることであったが、そうでもしなければ琉球王の面子が立たなかったであろう。これは「南面」が権威の最大の根拠であった中国との大きな相違と言つてよく、日本とも相違する。

## (3) 鏡

もうひとつ末吉宮縁起で無視できないのは「鏡」である。神社の神体が鏡であることは、むしろきわめて一般的なことであるが、縁起の最後にわざわざ鏡を語るのは、それだけ末吉宮と鏡との関わりが深かったことを示唆している。神社と関わる鬼面にはいくつもの事例があったが、いずれも神体という扱いを受けているわけではない。また末吉宮の位置を卜するために鬼面は決定的な役割を果たしたが、それが神体とされたわけではない。ここでは、鬼面を神体にはできなかったゆえに、鏡を神体としたという一節を加えて事実との整合性を図ったのであろう。実際、琉球八社を取り上げただけでも、確認できる範囲で過半が鏡を神体、または神体の代理としている。これに対して普天間(満)宮と金武宮の神体は洞であったと思われる。ただし、その「深度」(に対する畏怖の心性・感覚)において「鏡」と「洞」は通底する。

熊野系の場合、神体は様々であるが、そもそも八咫鳥の「八咫」とは鏡(八咫鏡)を意味するから、熊野と鏡との関わりは深い。言うまでもなく八咫鏡は三種の神器の一つであり、天照大神の靈代として伊勢神宮に祀られている。『日本書紀』では、天照の岩戸隠れの折に、石凝姥が作ったものとしている。極めて単純化して言えば、「太陽を反射するもの」であるゆえに、太陽の代理であったことを示す。さらに末吉宮の場合、鏡は靈光すら発する。むしろそれは聖地としての靈力の高さを示すためのアイテムであったが、「靈光を発する鏡」とはまさに古代的心性の発現と呼んでよい。鏡は魔除けとしての船眼(龍眼)との関わりが考えられる。野村伸一は呉越の風習であるといい、そうであれば二千年以上遡ることになる(『東シナ海文化圏』講談社、二〇一二年)。

鶴翁が鏡を見いだしたのは大社(末吉宮)を建立してから後のことであつたという点も注意を要する。そして、「靈光を放つので」社殿内陣に蔵したということは、鏡そのものに靈力を感じる以上に「靈光を放つ」という機能に強い靈力を認めたと読み取れる。さて、では末吉宮縁起の鏡とはいったい何であつたか。それはただ、神体もしくはその代理として置かれた鏡というモノと、縁起というモノガタリとをつなぐ(二つの空間の同位性を負担する)いわばひとつのアリバイにすぎなかったのだろうか。こう考えてきたとき、私は和船が航海の守りとして鏡を備えた習俗に注目する。たとえば、その成立が平安期とも鎌倉期ともいう『元要記』(『大日本史料』第三篇)には、唐から帰朝する空海が鏡明神の加護によって船難を逃れたため、鏡神社を勧請したという伝承が記される。具体的な鏡ではないが、すでに鏡の靈力が語られている。

以上、鬼面・方位・鏡の三点から縁起後半のBについて考察を加えた。末吉宮が他の七社と異なる要素に着目したのであるが、末吉宮という名称の由来については明らかではなかった。ちなみに鹿児島県曾於市の熊野神社は、奈良時代から伝わるという「鬼追い」で知られるが、同市の一部がかつて末宮郷と呼ばれたことを付言しておきたい。

#### 4、末吉氏と熊野権現

そこで、まずは日琉交易の中に答えを求めてみると、ひとつ得られる仮説が末吉を名乗る一族である。<sup>(16)</sup>末吉氏は、坂上氏の流れを汲む平野氏の一族で、摂津国住吉郡平野郷（現・大阪市平野区）を本拠とする。東北征伐（侵略）で有名な最初の征夷大將軍・坂上田村麻呂の次男である坂上広野麻呂の曾孫で、秋田城介權守に任じられた坂上行松が平野行増を名乗り、平野庄の開発領主として平野氏の祖となった。末吉氏は、その平野氏の系統で、安土桃山時代に豪商であつた平野家の当主・平野隼人正利吉の弟、平野勘兵衛利方が豊臣秀吉に末吉と名乗るように言われたことから始まったという。

平野（現・大阪市平野区）の坂上一族は坂上氏を中心とし、庶家である平野氏から平野七名家、いわゆる「七名」と称する家々がわかれ、坂上氏を支えた。末吉氏は、その平野七名家の筆頭の家柄である。平野七名家は平野郷の自治権を掌握し、中でも末吉氏は絶大な権勢をふるって平野郷の発展に寄与した。<sup>(17)</sup>

豪商としての末吉氏は、航海業を営んで海商（海洋貿易に携わる商人）となり、秀吉や家康から朱印状を与えられて、いわゆる朱印船貿易で巨万の富を得た。平野勘兵衛利方の子・末吉孫左衛門吉康は、ルソン（フィリピン）に末吉船と呼ばれる朱印船を派遣し、海外貿易で活躍した。それらの功によつて幕府代官としての支配地も五万石に達した。末吉勘兵衛利安の後にも、勘兵衛長方・勘兵衛長明・孫左衛門利長らによつてルソンからインドシナにまで航海業の商域を拡大したという。そして、慶長六年（一六〇一）に設けられた伏見銀座の年寄の役職を、勘兵衛と孫左衛門で歴任した。江戸時代になると末吉氏は東末吉家（勘兵衛家）と西末吉家（孫左衛門家）の二家に分かれたが、両家とも江戸時代を通じて繁栄し、現在も平野の地に在る。

沖縄に末吉という名字は多い。各種の人名辞典によれば、西原間切末吉村（現・中頭郡西原町）がその発祥の地であるといい、西原町周辺の宜野湾市や浦添市に多く、「スーシ」「シーシ」等と発音してきた。末吉宮のある場所は現在那覇市首里末吉町と呼ばれている。島嶼では伊是名島や栗国島といった沖縄島周辺の島々に多く、伊是名村で二番目、栗国村で三番目に多い名字である。日本本土では九州南部に広く分布し、人口では鹿児島県がこの名字の最多を占める。中でも鹿屋市・鹿児島市に多いという。また福岡県・長崎県にも分布しており、特に福岡県では豊前市・みやま市の周辺に多く、豊前市では軒数で十位以内に入る。さらに千葉県勝浦市に多く、勝浦市でも軒数十位以内であることが着目される。鹿児島、長崎、福岡、そして千葉の勝浦に分布する状況は、黒潮の存在を強く想起させるからである。



これらに対して大阪では少ない末吉姓であるが、末吉宮の命名に摂津平野の末吉氏もしくは各地に展開した一族が関わった経緯はないのだから。以上見てきたように、末吉宮の文献的初出は慶安元年(一六四三)開板の『琉球神道記』であり、「未好」と表記する。すなわち、この名称がまだ「未宮」に固定していなかった事情を窺わせる。

熊野神社とは熊野三山(熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社)の祭神を勧請した神社のことである。熊野詣の盛行や荘園の寄進、あるいは熊野先達の活動によって熊野信仰が伝播したことにより、全国に熊野三山の祭神を勧請した神社が成立した。熊野三山の祭神である熊野権現には、主祭神である熊野三所権現だけでなく十二所権現も含んでいる。熊野三山の祭神を勧請するという場合、三所権現のいずれかの神または三神すべて、あるいは十二所権現すべてが若宮のみを勧請する場合や、九十九王子の中でも重要な五体王子を勧請する例もあるといい、それらすべてを含めて熊野神社とした場合、総数は三千以上になるとい<sup>(18)</sup>う。

有史以前から自然信仰の聖地であつたとされる熊野(紀伊国牟婁郡)の熊野三山は、平安時代末期から鎌倉時代初期、いわゆる中世熊野詣における皇族や貴紳の参詣によって確立した。しかし中世熊野詣を担った京からの参詣者は、後鳥羽上皇に代表される皇族や貴族、あるいは上皇の陣営に加わった熊野別当家が承久の乱で没落したことによって実質的に終焉し、貴族の参詣も十三世紀でほぼ途絶える。承久の乱以降は、貴族に代わる参詣者層として地方武士が台頭し、十五世紀頃には一般民衆の参詣者が「蟻の熊野詣」と呼ばれるほどに拡大した。室町時代から戦国時代にかけて、熊野山領の荘園からの収入減が先達や御師の活躍を刺激し、熊野先達の活動が全国に及んだことで熊野信仰は一層の流布拡大を見せた。たとえば金刀比羅宮には熊野が合祀されているし、熊野もまた金刀比羅と同様「海の神」であつた。熊野も金刀比羅も海に向けて山岳に開かれた霊域である。また、同じく山岳寺院として知られ、末吉宮と同様に懸造り(懸崖造り)で名高い京都の清水寺(清水神社)には、末吉氏が奉納した末吉船の絵馬が少なくとも三枚所蔵されている(脇田修「近世の国際交流(1)―近世初期大阪の国際交流―」)。

ところで尚泰久といえ、在位は一四五三年から一四六〇年までの七年間で、在位後半の一四五八年に、いわゆる「万国津梁の鐘」を铸造したことはよく知られている。まさに十五世紀、一般民衆の熊野参詣が最盛期を迎えた時代である。次節に見るように薩摩に居たと思われる鶴翁が足を延ばせたとすれば、おそらく堺や京都までではなかったか。そして熊野信仰の盛況にもかかわらず、熊野への参詣がかなわぬままに、修行成就の暁に参詣することを誓って帰琉したものと考えられる。

平野氏と杭全神社(現・大阪市平野区)との関わりは広く知られる。杭全神社は、田村麻呂の孫である坂上当道<sup>まさみち</sup>の勧請と伝え、建久元年(一一九〇)に熊野證誠権現(伊弉諾尊)を、元亨元年(一一三二)には熊野三所権現(伊弉册尊・速玉男尊・事解男尊)を勧請して、「熊野三所

権現」の勅額を後醍醐天皇に賜り、熊野権現社総社となった。杭全神社は末吉氏の奉納した末吉船の絵馬を所蔵<sup>(19)</sup>し、この関係は末吉氏にも該当するだろう。大阪・河内平野に熊野系神社は少なく、住吉・天神・祇園の三系が多い（河内に入ると春日系が増える）。しかし、平野出身の末吉勤兵衛らは熊野を信仰したのである。そうであれば、鶴翁の伝承と現実との接点を探し出すために、天界寺・熊野権現などに着目する必要がある。中でも鶴翁が天界寺の住職であったという事実は、きわめて重要である。そこで以下しばらく、かつて琉球に存在した天界寺と、その周辺を見て行きたい。

## 5、天界寺との関わり

### (1) 尚泰久と尚徳

妙高山天界寺（てんかいじ・てんがいじ）は現存せず、首里城の西に当たる那覇市首里金城町に旧址のみが残る<sup>(20)</sup>。首里城の待賢門からの道沿いに、王家の墓域として著名な玉陵<sup>たまごう</sup>に隣接して天界寺は在った。宗派は臨済宗。尚泰久の代に湊隠安潜を開山として建立された。地元では「ていんけーじ」と呼ばれ、天界禅寺とも称された。泰久がこの寺をどれほど重用したかは、以下にその一端を示す通りである。円覚寺・天王寺と並んで琉球の三大寺の一つとされたが、明治末年頃に廃寺となり、現在は那覇市指定文化財の井戸と石垣の遺構が残るのみである。

尚泰久は尚巴志の五男であり、第一尚氏第六代の国王である。『中山世譜』は永楽十三年（一四一五）生誕とするものの、在位中に泰久が鑄造させた複数の鐘銘には「琉球国王大世主 庚寅慶生」とあり、そうであれば永楽八年（一四一〇）の生まれである。泰久には複数の兄がいて王位に就く可能性は低かったが、尚巴志を継いだ兄尚忠（在位一四四〇～四四）の子は尚思達（在位一四四五～四九）だけで、その思達には子がなかったために、兄（尚巴志の第六子）の尚金福（在位一四五〇～五三）が即位した。金福を継いで琉球国王になったのが泰久である。「志魯・布里<sup>しろうふり</sup>の乱」と呼ばれる王位継承の内乱が起き、漁夫の利を得る形で王位に就いたのであった。

天界寺は景泰年間（一四五〇～一四五七）に尚泰久の勅命で建てられた。『琉球国由来記』によれば、その構造は巧美を尽くしたものだだったという。そもそも泰久は第二尚氏第三代の尚真と並んで、最も篤く仏教を信仰した琉球国王の一人だった。一例を挙げれば、七年間の治世に鑄造した梵鐘は二十三口にも及んだという。天界寺開山の湊隠安潜については詳細不明であるが、梵鐘二十三の内十七口までを撰文したのが湊隠

安潜であり、泰久の篤い尊崇を得ていたことがわかる。

泰久の生前に天界寺大宝殿(仏殿)は完成せず、泰久崩御後に遺志を継いで天界寺伽藍を完成させたのが尚徳(在位一四六一～六九)であった。『中山世譜』は正統六年(一四四一)生まれとするが、『世祖実録』は成化七年(一四七二)に「国王は年三十三歳なり」とし、宣徳四年(一四二九)生まれであったようだ。そうであれば泰久三十歳(『中山世譜』に従えば十八歳)の折の子である。

第一尚氏王統第七代にして最後の王である尚徳は、父泰久が崩御すると天界寺を廟所とし、成化年間(一四六五～八七)に大宝殿を建立した(『琉球国由来記』)。鐘銘によれば、琉球国中山府君の世高王(尚徳)が金鐘(銅鐘)を鑄造し、開基安潜(溪隠安潜)に銘を撰しめたと(2)う。この鐘は後に天界寺から波上宮に移され、さらに金武観音寺に移された。第二次大戦中に紛失したが、戦後に金武の山中で発見され、再び観音寺に納められたという数奇な運命をたどる。

尚徳は、成化元年(一四六五)に官吏を朝鮮王朝に派遣して朝鮮人漂流民を送還している。<sup>(22)</sup>漂流民送還は、漂流・漂着の当該国による相互履行が当時は義務と考えられていた。ただし、履行期限はない。この折の使節派遣の名目は、『世祖実録』によれば天界寺を建立したものの経典がないために、大莊尊経(大蔵経)を求めたというものであった。普須古や蔡璟から成る使節一行は、景福宮で朝鮮国王の世祖(在位一四五五～六八)に謁見し、天竺酒を贈った。普須古が世祖の前で開封したところ、担当官が酒と砂糖を取り違えていたため中身は砂糖という大失態を演じた。しかし世祖は、「これは御前の過失ではない。御前の国王が私に天竺酒を贈ったのは、私がこれを飲むと思ったからである。御前が贈物を開封して、それが天竺酒ではなかったとはいえ、御前の王が御前を遣わした好意を飲むことしよう」と機転を利かせたため、琉球使節は体面を保つことができたという。その後、普須古らは、金剛経・法華経など大蔵経の一部に加え大量の法典・法帖を二部ずつ携えて琉球に戻った。国王に献上するものと、寺院に常備するものの二部ということであったらう。

このように二代の国王が建立と経営に尽力した天界寺であったが、第一尚氏の断絶により、その後百年余の歴史は未詳である。琉球正史『中山世譜』によれば、成化五年(一四六九)に尚徳が崩御すると法司は世子を擁立しようとして群臣を宮殿の御庭(ウナ)に集めたが、その場で一老人が重臣金丸(尚円王)の擁立を宣言した。近臣や貴族は変事と知って逃走し、王妃や乳母は世子を助けようと真玉城(マダマシマ)に隠れたが兵に殺害され、遺体は崖下に遺棄されたという。崖下への遺棄は、日本中世とりわけ鎌倉期を想起させる。「谷」と呼ばれる谷地形の多い鎌倉周辺には、今でも随所に遺棄伝承が語られている。

『成宗実録』によれば、尚円が朝鮮に派遣した自端西堂は成化七年(一四七二)に朝鮮国王成宗(在位一四六九～九四)に謁見した。そこで

自端は、尚徳が成化五年（一四六九）八月十八日に崩御したと述べている。成化元年（一四六五）の時点で「国王（尚徳）に子四人有り、長子は年十五ばかり、余は皆幼なり」（『世祖実録』）とされるので、尚徳には世継の他に幼子が三人いたことがわかる。しかし成化七年には先述の通り世子（王子）は十九歳であり、世子は王位に就く前に没したため次子の中和が王位に就いたと見られている。そして中和は在位わずか一年余り、十六歳で金丸らに殺害されたと思われる。このようにして第一尚氏は滅亡し、第二尚氏の時代となる。

(2) 十五世紀～十七世紀の復権

末吉宮の史料がほとんど知られない現在、末吉宮を考えるために重要なのは天界寺である。政変によって第一尚氏が断絶し、第二尚氏の成立から百年以上にわたって天界寺は記録に載らない。したがって、その間の動静は不明だが、先述の通り、近年の発掘調査によって十五世紀中頃から十七世紀前半までの地層より遺構が出土し、これが天界寺の跡と考えられている。<sup>(23)</sup> 天界寺は、第二尚氏の時代にあつてもなお重要な寺院と位置づけられ、円覚寺・天王寺と並び崇敬された。

天界寺の創建時（十五世紀中頃）に鶴翁が尚泰久の周辺に実在したことは間違いない。その後十五世紀末から十七世紀にかけて末吉氏が朱印船貿易で東南アジアまでを貿易圏とする頃の天界寺の動向を、主に琉球側の史料『中山世譜』『琉球国由来記』『遺老説伝』『球陽』等によって確認しておきたい。<sup>(24)</sup>

永禄二年（一五五九）四月九日付の島津貴久書状（『大日本史料』）は、天界寺の住持と世名城大屋子が薩摩に赴いたことを記す。<sup>(25)</sup> 島津貴久は一五一四年に生まれ、七四年に没した。つまり鶴翁や尚泰久からは、ほぼ百年後のことであり、「天界寺叔和尚」は鶴翁の何代か、あるいは十何代か後の住持と考えられる。また、万暦九年（一五八一）にも天界寺の修翁を薩摩に派遣している（『中山世譜』）。天界寺僧の薩摩派遣は、薩摩の琉球侵攻によって明との両属が始まる徳川時代初期以前から行なわれていたのである。

末吉宮縁起に見る熊野遙拝は、鶴翁も薩摩に派遣されていたと考えれば辻褄が合うが、早くも十五世紀にそのような関わりがあつたか否かは明らかではない。現実として熊野への参拝も可能であつたが、倭国滞在の間には修行が成就しなかつたと縁起を素直に読めば、鶴翁の倭国滞在所を薩摩に限定する必要はない。そもそも十五世紀後半の薩摩は、外には倭寇の活動拠点の一つであり、内には関東武士団と在地武士団が抗争を繰り返す騒乱の時代にあつた。田村省三「海から見た鹿児島歴史」は以下のように記す。<sup>(26)</sup>

中世の倭寇、とりわけ十四～十五世紀にかけて出没した倭寇は海賊としてのイメージが強いが、十六世紀の倭寇の中心は、福建・広東諸

地域の海上交易者、すなわち密貿易商人の集団である。しかもこの時代の世界の銀産出の1/3を供給したとされる、日本の石見銀山の銀製産を背景とする日本商船の南下が、東アジア地域全体の経済に波及して行き、これら密貿易の横行に拍車を加えた。

そして、いわゆる大航海時代の到来によって、先ずポルトガル人がこの海域に関心を示しはじめた。天文元年(一五四三)に種子島に鉄砲を伝えたポルトガル人は、ジャンク(中国古来の木造船)で案内されたという。福州のジャンクであっただろうか。未だ上海が綿紡績手工業の中心地であり、香港に海軍の要塞が築かれる以前のことである。

有名な明の貿易商人である王直が平戸や五島を拠点とする倭寇の頭目となり、徐海と名乗った倭寇の船団が大隅・薩摩を拠点としたのもこの時代のことであった。<sup>(28)</sup> 天文元年(一五四九)にフランシスコ・ザビエルがマラッカ(マレーシア)から九州まで乗船したジャンクの名は、なんとポルトガル語で「海賊号」という名前であった。アヴァンと名乗る中国人船長も倭寇であった可能性が高いという。

倭寇のみならず、海を介した交易活動は地の利を得ていた九州の諸大名、とりわけ島津一統において盛んで、特に島津氏にはその趨勢が強かった。その結果、島津氏は相当な財力を有することになる。<sup>(29)</sup> ここからは、少なくとも二つのことが言えるだろう。ひとつは、後に鹿児島と呼ばれる九州最南のこの地域もまた大航海時代のただ中にあり、アジアという枠を超えてヨーロッパともつながっていた。ふたつめは、鹿児島(特に薩摩)の在り方は、本土各地の海民・海商の拠点に日本と琉球を結び付ける力が内在したことを改めて認識させる。春屋宗園(一五二九~一六一一)の『一黙稿(大寶鑑鑑國師一黙稿)』にも、「球陽天界寺主盟修翁善公」の弟子宗智首座が師修翁の道号偈を春屋宗園に求めたという記事がある。修翁とは後に円覚寺住持となった修翁智善、すなわち、ここでも天界寺の住持が使僧として薩摩に、さらには京都にまで派遣された事例を確認できる。円覚寺といえ、京都妙心寺で首座となり、帰琉後に首里円覚寺住持となった徳叟宗智(一六五七~一七三〇)に思いつく。

禅僧を外交に使役する慣例が琉球でどのように始まったのかは未詳だが、十六世紀後半の天界寺僧はすでにそのシステムの中に在ったと言える。ただし、それより一世紀前の鶴翁が、どのような経緯で琉球から倭国に渡り、おそらく京都東福寺での修行中に、なぜそれほどまでに熊野に固執したのかは、ここまでの考察の範囲からはまだ理解できない。

尚永王の四年(一五六二)、天界寺の堂宇は火災によって灰燼と化した(『琉球国由来記』)。万暦年間(一五七三~一六二〇)に方丈と庫裏が再建されたが、堂宇は未築のままであったらしい。天啓五年(一六二五)に至って丈室を修造するのに合わせ、ようやく大殿を再建、順治年間(一六四四~六一)に方丈を修築した。さらに順治十一年(一六五四)に大門を修復したという。



末寺に安国寺・慈眼院・大悲院・慈照庵・寿福庵・普門院等を擁する大寺であつたが、天界寺は第一尚氏に關連する寺院であつたため、第二尚氏時代当初は王廟とされなかつた。しかし、『球陽』によれば万曆三十三年（一六〇五）に尚寧王（在位一五八九～一六二〇）が貴戚の者を天界寺に安置したといひ、このことが天界寺を王朝の廟所とする先例となつた。

康熙三十四年（一六九五）、天界寺住持の了道は丈室・厨司の新築を願ひ出た。奏上文によれば大門の左右には白石製の獅子などが彫り込まれており、木造の仁王像が安置されていた。しかし年月が過ぎて門は朽ち、像も廢れた。奏上の効あつてか薩摩から石像を得て、奏上の翌年（一六九六）に住持の蟠山が開眼供養を執行した。同三十七年（一六九八）には門内の仁王像が虫害で朽損したために二体を新立している。

尚稷（尚円の父。生年不明～一四三四）・尚懿（尚寧の父。生年不明～一五八四）・尚久（尚豐の父。一五六〇～一六二〇）は国王の父であつて、王位に就かなかつた人たちが、彼らの位牌は王廟である崇元寺に安置されていた。康熙三十八年（一六九九）に至り、唐宋の儒者の奏上により、尚稷・尚久の位牌を天王寺に、尚懿の位牌を天界寺に安置した。このように、十六世紀から十七世紀にかけて天界寺は琉球王国における重要度を次第に増してゆくのである。

この前後、康熙三十六年（一六九七）には了道が術者に泉のありかをトさせ、術者は「ここを百尺（約三十m）掘れば清泉が湧くでしょう」と答えた。よつて公府に訴えて、その深さまで掘ると甘泉を得た。早に遭えは近隣の渴きも癒すに充分であつたといひ、現在も天界寺跡にその井戸（カー）は現存する。『琉球国由来記』には、編纂された康熙五十二年（一七一三）以前に就任した天界寺住持の名が掲載されている。分外・一周・春甫・修月・明宗・靈道・春叔・心源・松屋・雄岳・乾叟・春嶺・心了・久山・太伝・達全・説三・石峰・際外・湛然・叟山・蘭田・徳叟・了道・蟠山・康岳・東峰・覚翁・江外の二十九名であり、二十三番目以降に続けて徳叟・了道・蟠山の名が見える。また、七番目の春叔が島津貴久の書簡に薩摩への派遣が記された「叔和尚」であろうか。

十七世紀末に天界寺は再建された。繰り返し述べているように、発掘調査でこの時代の地層から本堂跡・溝・土坑などが検出され、相当程度まで再興したことがわかつてゐる。このように寺勢に波はあつたものの、一貫して天界寺の存在したことが、鶴翁伝承の途切れることなく語られてきた最大の要因であつたと思われる。

### (3) その後の天界寺と末吉宮

ここからは十八世紀以降、現在までの天界寺の推移を簡単に見ておきたい。そうすると、琉球王国もまた財政再建に迫られて行つた状況が伝

わってくる。

正史『球陽』によれば、雍正十一年(一七三三)には天界寺と天王寺に王と王妃をはじめとする一族の位牌が安置されていたが、手狭になったために屏主(当主より五世以前の祖先)を合祀して一つの位牌にまとめた。翌十二年(一七三四)には尚敬王(在位一七二一～五二)の三廟(天界寺・天王寺・崇元寺)への行幸に際して、住僧による儀礼を簡素化した。また、国王が正月と七月に三廟に行啓する際、各寺から正月には御嘉例(縁起物)、七月には立御菓(供物)を供することが恒例となっていたが、雍正十三年(一七三五)にはこれを禁じ、公司から献ずるとした。いずれも財政緊縮に伴う行財政改革と寺社管理強化の一環と理解できる。

毎年七月七日の節には円覚寺・天王寺・天界寺に行幸して先王の位牌を拝していたが、乾隆二年(一七三七)からは七月十四日に国王が行幸し、翌日十五日に王妃も拝謁することとして七日の拝礼を廃止している。また、除夜と冬至の前日天界寺で行なわれる礼の予行演習の際、唐栄の司官はそのまま天界寺に宿泊することになっていたが、この年から当日朝に予行演習を行なうとして宿泊を停止した。さらに、乾隆六年(一七四一)には三寺での音楽の演奏を廃止した。いかに芸能の国琉球であっても、国家財政の危機には逆らえなかったといえる。天界寺には破損した錫製燭台があり、十八～十九世紀に中国で製造されたものとされている<sup>(31)</sup>。その底部には「界」字墨書があつて、天界寺で用いられた印と考えられている。そのように豪華かつ絢爛たる調度を維持しつつも、祭祀・礼楽を王朝の経済実態に合わせて行かざるを得なかったのである。

明治十二年(一八七九)の琉球処分後、天界寺は七十九銭八厘を給された。廃藩置県の際に官寺であつたため旧高(石高)換算で支給されたものであつたが、同十六年(一八八三)には支給停止の布告が出され、崇元寺・円覚寺・天王寺・龍福寺等の諸寺と共に翌年には俸禄と営繕費を停止された。そのため急速に衰え、明治の間に廃寺になったという。

天界寺の堂宇は明治末まで残存していたというが、大正から昭和戦前にかけて記念運動場や尚家の果樹園、三殿内などに次々と変わって行つた。首里城の三御嶽が統合されて三殿内が建てられ、ここに神女屋敷が存在していたという。しかし、沖縄戦でことごとく破壊された。司令部のあつた首里城に近いことから、戦時には米軍の激しい砲撃を受けたが、戦後にはすぐ木造家屋が建てられたという。

旧天界寺の井戸は、平成五年(一九九三)に那覇市指定文化財となつた。平成十一年(一九九九)からは那覇市教育委員会や沖縄県立埋蔵文化財センターによつて発掘調査がなされ、井戸周辺は復元保存されて現在に至る。

天界寺について長々と記してきたのは、末吉宮の沿革が必ずしも明らかではない以上、天界寺の事蹟に末吉氏や中世日本との関わりを窺わせる何らかの徴証が見られればと考えたからである。ただし、ここまで見て来たように、直接の証拠はなかった。天界寺を創建した尚泰久といえ

ば、二〇〇〇年の沖縄サミットで有名になった万国津梁の鐘（本来は首里城正殿の梵鐘。当時は残欠部が沖縄県立博物館蔵）をはじめ、多くの寺院に梵鐘を寄進した国王である。同梵鐘は藤原国善という倭国職人の手で鑄造されており、まさに「万国津梁」の銘に象徴される琉球王国の海外貿易が最も盛んな時期の国王であった。十五世紀後半に入る頃、いわゆる「大交易時代」である。僧鶴翁が倭国に仏道修行に赴いたことも、そのような時代背景の中で捉えられるべきであり、琉球王朝が衰退に向かった時代には到底不可能なことであつただろう。

ところで遍照寺は末吉宮の別当寺であり、かつて現在的那覇市首里末吉町に存在した寺院である。開山は、ほかならぬ鶴翁で景泰年間（一四五〇～五七）に建立されたと伝えられる。元々の寺号は万寿寺といい、天界寺と同じく臨済宗であつたが、康熙十一年（一六七二）に真言宗に改められた。その後さらに薩摩によつて遍照寺と改名させられた。末吉宮と同様、別名を末吉寺（しーしぬていら）と呼ばれていた遍照寺は、末吉宮共々沖縄戦で消失したが、寺地を沖縄市久保田一丁目に移転して再建された<sup>(12)</sup>。

末吉宮が尚泰久の治世である景泰年間（一四五〇～五七）に開創されたことは間違いないとして、重要なことは慶安元年（一六四三）出版の『琉球神道記』巻第五に見える「末好権現」以前に、「末吉宮」「末吉権現」「末吉山熊野三所大権現」などと「末吉（末好）」を冠して呼んだ文献を見いだせないことである。すなわち、この間の名称は未だ不明と言わざるを得ないのである。

その間には約二百年の開きがあり、その二百年の間に十六世紀から十七世紀にかけて海商末吉氏一族の活発な交易活動期間が入って来る。もとより、これだけの徴証から何かを言うことは不可能である。しかし、記録には残らぬものの、僧侶や神官の何層倍もの海商たちが、この時代には当たり前のように日本と琉球の間を往来していたことを疑う余地はない。彼らが琉球国に關与した度合いや内容も、徐々に明らかになりつつある。文化的貢献の内実も、今後さらに明らかになって行くだろう。

## 6、おわりに

末吉宮の縁起で注意すべき点はまだ少なくないが、紙幅が尽きた。最後に「夢」に着目する。末吉宮の創設に決定的な役割を果たしたのは、鶴翁と尚泰久とが同時に夢を見たという一事だったと読み取れるからである。

近世の物語から「三人同夢」という型を析出し、これを考察したのは高田衛である<sup>(33)</sup>。末吉宮縁起では、鶴翁の見た夢告は詳細に述べられ、そ

の一方で王の見た夢は具体的には語られていない。つまりそれは両者の見た夢が同じであったことを示唆している。いわば「二人同夢」である。

「同床異夢」という四字熟語があるが、縁起の事例は「異床同夢」とも呼べる。そして、鶴翁が熊野権現の夢告通りに北に向かって呼ばわり、霊威の在る場所に至って鬼面を得（または見）、実際に末吉宮が建立されたあとで（建立したのは、むろん尚泰久である）霊光を放つ鏡を見つけ、それを社殿内陣に蔵したというところで縁起は終わっている。つまり王の夢は、熊野権現が示現して夢告を行なったという鶴翁の夢そのものではないとしても、それと共振する、相互陥入的なものであったと言い得る。その描写が具体性を欠くのは、重複に陥ることを避けたか、実際にそれがどのような夢であったかを語るのは難しいので、享受者の想像にまかせたという形でまとめたという、いずれかの理由だったのであろう。

のちに天界寺の住持となる琉球僧の鶴翁は、倭国に渡って修行をした折には熊野へ参ることができなかった。そこで熊野に対して、「帰国して修行を積み、本願を果たした際にはぜひ参拝をしたい」と誓った。鶴翁は帰琉した後、修行を積み、誓った通りの成果を得た（それは、天界寺の住職になったことか）。そのため、時の王である尚泰久に熊野参詣を願い出るが、何度申請しても許されなかった。

これは、就寝時に見る「夢」とは別の「夢」（希望）をかなえる物語でもある。その「夢」の代償として、鶴翁は琉球の地に熊野権現を勧請する。それをかなえたのは鶴翁が熊野参詣の実現を申請し続けた尚泰久であり、それがなかったのは鶴翁と泰久が同夢を見るに至ったからである。すなわち、同夢を見せたのは熊野権現であらう。

言い換えれば鶴翁の夢＝希望（熊野大社への参詣）はかなわなかったが、より高いレベル（熊野三神の勧請。つまり現世で熊野と共に生き続けること。また永久に琉球に熊野を示現させること）を以て実現したのである。それも鶴翁の一貫した熊野信仰による、と物語の話者は示唆している。むしろ、その一点こそがこの縁起の肝であった。ただ、そこにはやはりひとつのネジレがあつて、いくら勧請した熊野権現であつても、それは本物の「熊野」ではない。そこに、鏡という写像の喩が介在する余地があつたのではないか。あくまでも物語として見た場合、そこに鶴翁の、そして沖繩の切なさがある。

すべて三神を祀る琉球への熊野伝来は、先ず一社への勧請があり、そこから他へ流布したと類推できる。現存する各社の縁起から考えれば、その最初の一社とは末吉宮ではなかったか。琉球八社の考察に当たって、私が末吉宮の考察から始めたのは、そのような理由による。このことの当否については、他の七社、さらには七社以外の各社の考察を通じて、徐々に明らかになればと考えている。

かつて、こんな文章を書いた（『内。引用に際しアラビア数字を漢数字に改め、ルビと注を補った。』

『琉球八社のうち、七社までが熊野系であることにこだわっている。なぜ熊野なのか。そして、熊野信仰は、いつ、どのような具合に琉球に關与して行つたのか。琉球王国時代の神社で創設年代のはっきりしているものは、わずかに二社。ひとつは浮島神社であり、もうひとつは安里八幡宮である。前者が一四五二年（尚金福の時代）、後者が一四六六年（尚徳治世）。しかし、他の神社が、これらより後れるかといえば、必ずしもそうではないようだ。たとえば波上宮は、存在が確認できるのは『琉球国由来記』巻十一の一五二二年であるが、加治順人氏の言うように（おきなわ文庫『沖縄の神社』ひるぎ社、二〇〇〇年）、同境内にある護国寺と同時期の創設とすれば、察度王の時代（一三二一―一三九六年）と、浮島神社より百年ほどさかのぼる可能性がある。また、波上宮の鎮座する断崖（というより、私は巨石と見たい）からは先史時代の人骨が発掘されており、それらが筍崖やハナグスクと呼ばれるずっと以前から墓地であつたことは、ほぼ間違いない（『沖縄大百科事典』等参照）。

その波上宮をはじめとして、沖宮（存在が確認できる年代は一四五九年。以下同）、天久宮（十五世紀後半）、普天間宮（十五世紀後半）、末吉宮（十五―十六世紀）、金武宮（十六世紀）、識名宮（十六世紀後半）が、いずれも熊野権現を祀つた熊野系であり、八社のうち安里八幡宮（先述の通り、一四六六年）のみが八幡神を祀つた八幡系である（逆に、この点も興味ぶかい）。これらの中では、真言僧の日秀上人が、高野山での修行の果てに補陀落渡海を試み、琉球に流れ着いたとする金武宮の縁起がわかりやすい。家都美御子大神（家都御子大神）・熊野速玉大神・熊野夫須美大神のいわゆる「熊野三神」は、その名の通り熊野で発生した祭神であり、熊野とは元来、密教系の修験者の霊場であつた。高野山を本山とする真言密教は、古くから熊野信仰と結びついてこの地で発達した。浄土を目指して紀伊半島の南端から船出した人々の大半は、あえなく海の藻屑と消えたであろうが、その中に運良く琉球に流れ着く者があつたとしても不思議ではない。

ただし問題は、加治氏も言うように、なぜ熊野三神が琉球に根付き、他の祭神や宗派をほとんど凌駕したのかということ。そして、それがなぜ琉球本来の神々と融合（ある場合にはそれを駆逐）しつつ琉球の人々に受け入れられていったかということである。太陽神信仰の盛んな琉球で、アマテラスオミカミでさえ捨象されていったというのに、南海楽土（浄土）の思想が、うまくニライカナイ信仰に合致した（<sup>34</sup>）というのはわかりやすい説明だが、じつはそのニライカナイ信仰こそ浄土信仰がもたらしたものである可能性は皆無だろうか、などと考えている（<sup>35</sup>）。

爾来十年が経つ。本稿では日本と琉球との間で人・物と共に宗教や思想を運ぶのに重要な役割を果たした海民・海商への考察を最小限に限定せざるを得なかつた。続稿を期したい。



【付記】本稿は、平成24・25年度大阪商業大学比較地域研究所研究プロジェクト「環太平洋における東アジアからの移住および文化に関する研究」(代表：飯田耕二郎教授)の成果の一端である。とりわけ飯田先生からは種々のご教示や資料の惠贈を賜ったことを記し、深く御礼申し上げる。

## 注

- (1) 末吉宮本殿の修復工事は平成九年(一九九七)、拝殿の復元工事は同十年(一九九八)のことであった。
- (2) 以下、原則的に年号は琉球側の史料には琉球王国の公暦である明・清暦を用い、日本の史料には和暦年号を用いる。
- (3) 外間守善・波照間永吉編著『定本 琉球国由来記』(角川書店、一九九七年)による。
- (4) 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編『琉球史料叢書 第一』(井上書房、一九六二年)による。
- (5) 鳥越健三郎『琉球宗教史の研究』(角川書店、一九六五年)第五編 明治の宗教政策・第一章 古琉球の社寺概観。本来は臨済宗であったが、薩摩の侵攻以後、他の多くの臨済宗の寺院同様、真言宗に改宗した(加治順人『沖縄の神社』ひるぎ社・おきな文庫、二〇〇〇年参照)。
- (6) 末吉宮社務所横の石造案内文(一九七二年五月十五日「本土復帰」時の国指定史跡登録に際して、文部省・沖縄県の連名で設置)によれば、「第二次大戦で砲撃を受け、建物の礎石と柱二本と虹梁(頭貫)を残したのみで飛散しました。現在の建物はこれら残った礎石と資材を基に昭和四十七年に復元修理をしたものです」。
- (7) 『執心鐘入』の詞章に「露の命をとらんとよ、行く末吉のこの御寺、頼まば終に我が命、たんで御助け我が命(意識はかない命を取ろうとは、行く末よしという末吉のこの御寺を、後生頼りにやって来た私の命を、どうかお助けください私の命を)」「かいじやう鐘の下に隠さ、たうたう入やうれ入やうれ」(同前・開静鐘の中に隠そう、さあさあお入りお入り)など見える。
- (8) 縁起は、『琉球国由来記』の他に『琉球神道記』『球陽』等も参照。文献上では末吉宮の泰久年間(一四五四～六〇)が最古、次いで八幡宮が尚徳の喜界島遠征の折(一四六六)、天久宮が成化年中(一四六五～八七)であるが、波上・沖・普天間の三宮はこれより遡る可能性がある。八社以外では浮島神社(一四五二年、ただし現存せず)が最も古く、識名・金武の両宮は十六世紀に入ってから創建と考えられる。霊石や洞窟への信仰から社殿建立までのどの時点を創建と考えるかで大きな幅が生じるが、本稿では日本との関わりを中心に考察するため、八幡神や権現神といった祭神紹来の時期を重視する。
- (9) すなわち、琉球八社とは本来的には寺院に由来していると考ええることもできる。以下に天界寺の考察を試みる所以である。
- (10) 八重山を中心に分布するアンガマーやミルク(弥勒)、またパーントウなどの仮面神(来訪神)との関わりが考えられてよい。それらも、かつてはもつと広範囲に分布していたと考えられる。まして鬼餅(ムーチー)の説話は沖縄全土で非常によく語られており、「鬼」という概念は沖縄には古くからあった。琉球開闢神アマミキヨ(アマミク)の直系の子孫が守ってきたとされるミントングスクに伝来し、沖縄戦で焼失した神面は、まさに鬼面であった(『高嶺久枝・芸道40周年記念講演パンフレット』二〇〇九年参照)。
- (11) 以下、圭室文雄編『日本名刹大事典』(雄山閣出版、一九九二年)等の事典、日本仏教会寺院名鑑刊行会編『全国寺院名鑑』(同刊行会、一九六九年)等の名鑑、

宗派別・地域別の事典・名鑑の他に、各寺院のHP等を参照した。

(12) 首里城発掘調査に関しては、各年度の調査報告書の他、沖縄県立埋蔵文化財センターの発掘調査速報展・出土品展示会等の資料を参照。

(13) 原田禹雄訳注『陳侃 使琉球録』（榕樹書林、一九九五年）参照。

(14) 原田禹雄訳注『中山伝信録（新訳注版）』（榕樹書林、一九九九年）参照。注（13）とも泉武『沖縄学事始め』（同成社、二〇一一年）も参照。

(15) 沖縄では霊力の強い人を「サダーカー（性高）」と呼ぶが、その「性」の密度が高かったと言える。鏡が割れると不吉だと考えたり、鏡台にカバーをかけたいたりした習慣は、鏡の霊力に対する想念が広く生活習慣の中にも根を下ろしていたことを示す。しかし近代化の中で、そのような観念は次第に薄らいでいるのが現状である。日本では鏡の持つ神秘性を餅や酒などの供物にも込めてきた経緯があり、現代でも鏡餅や鏡開きなどの習慣にその姿を見ることが出来る。鏡の語源はカゲミ（影見、この場合の「影」は「姿」、あるいは力カメ（力力は蛇の古語、つまり蛇の目）であると言われていたが、鏡と餅との同位・同相は示唆的である。沖縄の場合、餅菓子がある霊力に即座に結びつく形で、それは酒や水面また蛇（の目）へと拡大される。では鏡の放つ霊光とは何かと考える時、以下の事例が参考となる。「光を反射する鏡に日本人は霊力を感じ、鏡は弥生時代以来、宝器とされた。奈良時代には小型海獣葡萄鏡の内区だけを模した鑄造品、薄い銅円板に紐を取り付けた素文の儀鏡が鏡の形代として祭祀に用いられた」（奈良市の考古資料「寧楽地寶」「まつりのかたち」、奈良市公式HP）。天孫降臨神話で天照大神が「此の宝鏡を視まさむこと、当に吾を視るがごとくすべし。与に床を同くし殿を共にして、斎鏡をすべし」（この鏡を私だと思つて大切にしなさい）との神勅を出していることから、古代から日本人が鏡を神聖なものとして扱っていたことは明白である。

(16) 『大阪府全志』（大阪府全志発行所、一九二二年）等参照。なお、末吉氏と山岳信仰との関わりを「末吉一族の系譜」で末吉貴浩氏が示唆している（二〇〇七年。<http://www15.plala.or.jp/sr-you-yu/kakeinuhm.html>）。

(17) 平野は堺と並び、一時はそれ以上に栄えた。脇田修「近世の国際交流①―近世初期大阪の国際交流―」（大阪国際交流センター編『大阪の国際交流史』東方出版、一九九一年）によれば、朱印船の回数では平野の末吉孫左衛門の12回が堺の木屋弥三右衛門の10回を抑えて第一位であり、平野藤次郎は5回で第四位となっている。

(18) 熊野に関する主要参考文献としては以下の二点が挙げられる。宮家準『熊野修験』（吉川弘文館、一九九二年）、小山靖憲『熊野古道』（岩波書店、二〇〇〇年）。これらの他にも、宮幣中社熊野那智神社編『熊野三山とその信仰』（熊野那智神社、一九四三年。名著出版復刻、一九八〇年）、加藤隆久『熊野大神』（戎光祥出版、二〇〇八年）など参照。琉球の場合、祭神はすべて三神であり、流布が単線的に行われた可能性を示唆する。

(19) 魚澄惣五郎編『大阪文化史研究』（星野書房、一九四三年）所収「大阪郷土史の研究とその史料」参照。難読とされる「杭全」には種々の地名起源説がある。通説の中では「曲がった川」の「曲」が穩当かと思うが、もう一步踏み込んで「神の鎮まる地」である「隈」が妥当だろう。その意味でも、「熊野」との関わりが着目される。

(20) 以下、天界寺及び、その遺構や発掘調査結果は、那覇市教育委員会文化財課編『天界寺跡（那覇市文化財調査報告書第42・43集）』（那覇市教育委員会、一九九九年・二〇〇〇年）、『天界寺跡1・2（沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第2・8集）』（沖縄県立埋蔵文化財センター、二〇〇一・二〇〇二年）、また、山本正昭「天界寺考―発掘調査成果を参考にして―」（『沖縄埋文研究』1、沖縄県立埋蔵文化財センター、二〇〇三年）、HP「かげまるくん行状集記」より「琉球の官寺」

(<http://www.kagemarukunfrom.jp/>) 参照。近年の発掘調査によって、十四世紀後半～十五世紀前半の地層から掘立柱の建物のビット(竪穴)群が検出されている。したがって天界寺創建以前(グスク期)に、すでに集落が存在しており、天界寺の建立に伴って撤去あるいは移転を余儀なくされたと考えられている。

(21) 「旧天界神寺金鐘銘」(沖縄県教育委員会文化課編『金石文 歴史資料調査報告書Ⅴ 沖縄県教育委員会、一九八五年』参照)。

(22) 以下、和田久徳他訳注・沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編『歴代宝案編集参考資料5・7・10 明実録』の琉球史料(二〇〇一～二〇〇六年)参照。

(23) 注(20)の諸文献参照。

(24) 以下、文中で頻繁に引用・参照する琉中の記録(『琉球国由来記』『琉球国旧記』『中山世譜』『球陽』『英宗実録』『海東諸国記』など)は、注記を立てると煩瑣になるため本文中に引用指定をする。

(25) 「島津貴久書状案」島津家文書一〇七。(『大日本古文書 島津家文書二』)所収。注(20)のHP「かげまるくん行状集記」(<http://www.kagemarukunfrom.jp/>)より「琉球の官寺」参照。上記は個人のHPであるが、よくまとまっているため参照に値する。

(26) 田村省三「海から見た鹿児島島の歴史」(*Civil Engineering Consultant* VOL.256 July 2012: 特集 鹿児島島・火山とともに暮らす)。

(27) 南浦文之「鐵炮記(鉄砲記)」(慶応十一年(一六〇一)記、『南浦文集』所収)による。池上裕子『日本の歴史10戦国の群像』(集英社、一九九二年)参照。

(28) 三宅亨「倭寇と王直」(『桃山学院大学総合研究所紀要』第37巻第3号、二〇一二年)に詳しい。

(29) 新名一仁編『シリーズ・中世西国武士の研究1薩摩島津氏』(戎光祥出版、二〇一四年)、特に小山博「中世の薩琉関係について―戦国大名島津氏の領国形成と琉球貿易独占化について―」、岩川拓夫「中近世移行期における島津氏の京都外交―道正庵と南九州―」を参照。

(30) 具体的には久米村のこと。俗に「くにんだ」と呼ぶ。十四世紀末頃に成立し、その後、唐宮から唐宋と名称を改めた。中国系渡来民の集住地であるが、王府に重用され外交の拠点となった。

(31) 沖縄県教育庁文化課編『沖縄の金工品関係資料調査報告書』(沖縄県教育委員会、二〇〇八年)参照。

(32) 宗教法人東寺真言宗金剛山遍照寺は、現在は沖縄市桃原一丁目に霊苑「かなさ」を経営している。二〇一三年に亡くなった現代沖縄民謡と三線の名手・登川誠仁氏のCMで知られ、誠仁氏は現在同苑に歌碑とともに祀られている。

(33) 高田衛「物語の再生と夢語り―秋成・庭鐘・綾足たちの世界」(『新編 江戸幻想文学誌(ちくま学芸文庫)』筑摩書房、二〇〇〇年)参照。

(34) 寛政二年(一七九〇)に江戸で刊行された『琉球談』に、森島中良がアマミキヨとアマテラスとの共通性を述べて以来、この説はしばしば引用されてきたが、中良自ら述べるように学術的な根拠があるわけではない。拙著『森島中良集』(国書刊行会、一九九四年)参照。

(35) ブログ『沖縄・八重山探偵団』<http://bin-t-danet/>二〇〇五年十二月十四日(活字としては未発表)。同記事に対して、上里隆史氏より「波上宮の最古の記録は、最近「発見」された1452年頃を描いたとされる『琉球国図』に「波上熊野権現」とでています。(安里進「大宰府神社旧蔵『琉球国図』にみる一五世紀の琉球王国」『浦添市立図書館紀要』15号、2004)琉球になぜ熊野系が多いかという問題は、中世の熊野社が主に海路を経路として普及していったことも視野に入れる必要があると思います。沖縄のみならず、南九州の状況もあわせてみていくと何かわかるのではないのでしょうか。例えば種子島の島主種子島氏は熊野を信仰し、参詣路を海路に求めています。この経路は堺や雑賀への鉄砲伝来ルートと重なっているのも注目されます。」とのご教示を得た。